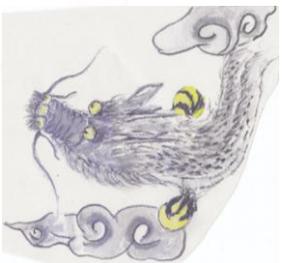




初春に町の翁の  
独りごと

# 柳橋散歩

平成 24 年 1 月 No.3



夕方にさると優雅に華やかにふる。と言つても本才の街  
ではない。江戸の情緒をその儘に粋な香りの境界線である

江戸水がしつとりと落ちつた家園を醸し出す

今日のお出先でり準備はどうか。三味や音日か聞こえませ

日お落る子樹には車塵さんお番だ。長者殿を來せて

この東り料亭へ来る

この水から夜更けるまで時がとまる

江戸の遊戯も知る男と女の命の洗濯場だ

柳橋り畔から泉清寺。柳光寺。柳水。はやし

津久松。柳の木。小舟。深川。二葉鶴の家

曙。まがや。いふ。長代仲。十八。鈴の家。暗柳

客の料亭が軒を並らわす

いこは。町そのもうが群。前ん繋。ごう。い。せん。百人。豆  
が集う境界線だ

「こので倒れりや。このかほんとり能ま(料)の倒れ」をんて  
てマジギヤクを言つたもうだ

戦前り(筆)次吉屋(大軒)柳橋并々街は昭和二十二年二月十九日

り空襲で焼失した。二月二十五日。三月十日と空襲の

跡より東京は焼土と化した。そして広島長崎と原爆

投下で八月十五日終戦を迎えた

戦後の混乱と餅より昭和三十三年頃から料亭の

復興建築が始まった





平和を最徴すまかりより本格的な料亭・建築である。京の雅と江戸の粋を集めた最高級料理贅を尽くした日本建築である。

因に私の家は紙戦りあたる年々建てたがバラックの料亭として知られり。障高障子の鱧を書いて、火消しり家だとすと解る。時代劇の出で来る様もたつた。

やがてこの街にも恩赦の時を迎えり

昭和三十七年頃から昭和四十八年頃までが最盛期と言ふよう。国が経済成長と共に、あちゆき方面にリスクが出る来た。車や洪水配管ガス、川の汚染、造り打ちか行も味百オキル言ツクと隅田川や護岸や堤防等々。江戸情緒を守り来る者い多くり問題が押し寄せた。

かくして一新又一新と料亭が消えて行つた。それだけい業者衆り凄まじく少なくなつていった。時り清流は止まりない津やかわり、頃は合は昔、夢り又夢り時は流れる

ここで思い出話を一つとも考へまじだが、やめとまじしよう。華やかな時り柳橋は私り宝物。すーっと胸り押したくまうたまじよう。

平成二十三年十一月、最後り料亭建築いふ垣が取壊す。指示板がはられた。跡地に二階建てりマンションが出来る。これに江戸時代から既に名所花街柳橋が完全に消える。

一人いふ垣り庭に立ち暫し思いに耽る



この名もこの柱も私が融れたことがある。せう、とう  
 五十七八年と前へなるだうう。懐しく思ふ心と言ひ、われ  
 の思ひが交又する。澤山う科年と舞台はあつたが、  
 帳もあつた舞台はいふ垣だつた。又訪れる人とVIP台  
 人見ばかり、政界、財界、世ととも、三島由紀夫も来た  
 ことがあるた。振り返つても遠い昔

平成二十四年壬辰の年、この日から新しい柳橋を創り  
 出せう。澤政知新の言葉も忘れず、飛龍り如く、さら  
 なる柳橋を

